

Title	1930年代の日・中の「歴史」創作について（1）： 「満洲国」言説の知の考古学的分析
Author(s)	伊勢, 芳夫
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 37-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91537
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

1930年代の日・中の「歴史」創作について (1)

——「満洲国」言説の知の考古学的分析——

伊勢 芳夫

1. はじめに

19世紀以降の帝国主義とそれ以前の帝国主義、言い換えれば、交通・通信技術の飛躍的に発展した時代の帝国主義と交通・通信が人力や自然に専ら依存していた時代の帝国主義との違いは、被支配民を政治・軍事的に抑圧し彼らから経済的搾取を行うだけではなく、被支配民社会の歴史/文化をそれらの本来のコード体系から切り離すと同時に支配者側のコード体系の中でコード化し直すことで支配者の言説編成に被支配民社会を取り込むことであった。その代表的なものが欧米を頂点とする文明のヒエラルキーであり、それが19世紀後半には福沢諭吉がいうように「世界の通論」になったのである。¹そして20世紀後半以降植民地は次々に独立していき、独裁体制もしくは民主主義体制の違いはあっても、新興国として政治的・軍事的自立をかなりの程度まで獲得したのであるが、言説レベルでは、自分たちの「声」の正当性を押し付け相手の「声」をフェイクとして排除しようとする大国の陣取り合戦の中で依然として敗者/弱者は勝者/強者の言説編成に取り込まれており、その意味で言説レベルの帝国主義は21世紀になっても弱体化することなく継続している。

ところで、このような言説レベルの帝国主義について論を進めるにあたり、本稿の最初に言説レベルの帝国主義の陣取り合戦について簡単に説明する必要があるだろう。

理論的説明は次節以降に詳述するとして、言説レベルの帝国主義の陣取り合戦の勝者は、獲得された領域において、現実空間及び仮想空間の事象/事件を取捨選択し、配列し、意味づけして物語を創作し、それを報道、もしくは歴史として流通させる権限を独占することになる。たとえば、A国がB国に対して軍事行動を行った場合、A国の言説支配下/影響下にある地域においては、「B国の抑圧民の解放を目的とした軍事支援」という物語が拡散されるのに対して、B国の言説支配下/影響下にある地域においては、「A国による侵略戦争」という物語が拡散するであろう。このように、創作された物語を報道し、歴史として流通させる権限の獲得を目指す争いが言説レベルの帝国主義の陣取り合戦であり、獲得した陣地が拡大すればするほど世界におけるドミナントな言説の地位へと格上げされる。

「1930年代の日・中の『歴史』創作について (1)」では、上記の言説レベルの帝国主義

¹ 福沢諭吉、『文明論之概略』、(岩波書店、1995)、pp. 25-6 を参照。

の陣取り合戦の研究をするにあたり、まず、Hayden White の歴史理論を援用しながら新たな「歴史」概念を提案し、そしてその「歴史」概念に適合した分析方法としての「知の考古学的分析」方法について説明を行う。

2. 歴史学、文学、そして科学の近似性

Hayden White は *Tropics of Discourse* において、「歴史書」と「(歴史) 文学」の近似性を修辞学やナラトロジーの方法論を援用して詳細に分析し、19 世紀の歴史研究者が「科学 (実証)」を志向する一方、文学との差異化を図ろうとした試みを批判している。²

White によれば、歴史を書くという行為は、収集され精査された記録を時系列により客観的に配列することではなく、記録に残る事象から歴史家が意図的に選別したものを「修辭的 (tropic)」に再構築することによって歴史家自身の解釈や意味を読者に伝える行為である。つまり、「Northrop Frye の範疇を使えば、悲劇的、喜劇的、ロマンティック、もしくは皮肉な物語」に歴史事象が配置されたものが歴史書なのである。³したがって、たとえばフランス革命を扱った歴史書というのは、その時の王や王妃は誰であったのか、バスティーユ牢獄を襲撃したのはどれくらいの数の人々でどの階層に属していたのか等々に関して、記録文書の詳細な調査から明らかになった「事実」の時系列的に羅列されただけの編纂物ではなく、文学者と同様のメタファーやメトニミーといった修辞技法や語りの技法を使用することで、歴史家によって脚色された「フランス革命」という物語ということになる。

上記のような White の歴史書に対する分析を踏まえつつ文化理論的に「歴史」概念を再考すると、様々な修辞技法、視点、語りの構造の中から歴史家が自らの構想に適した手法を選択し、特定の時代・地域の一連の歴史事象を色づけしてコード化することで「歴史」を完成し、その「歴史」メッセージが想定された読者によって解読され、意味/解釈が伝わるという仕組みが浮かび上がってくる。そして、そのような「歴史」というものに対する認識から、近代の歴史研究者が「科学 (実証)」を志向することによって文学と差異化を図ろうとしていることの不毛さを White が批判することは理解できる。ただここで、White の考察のプロセスに欠如している要素があることも指摘したい。White は近代の歴史研究者が「科学 (実証)」を志向することによって文学と差異化を図ろうとしているというが、彼のいうところの「科学 (実証)」について詳しく記述していないので、具体的にどのような分野の「科学 (実証)」方法が近代的な歴史研究において志向されているのかがわからない。一般的に「科学 (実証)」としてまず頭に浮かぶのは、物理学や化学の研究のように、対象から異質性や偶然性を極力排除し、その純粋な状態での特性を記述する行為であろう。したがってある物質の特性を研究する場合、極めて純度の高い試料を用いるとともに、外部からの影響を極力排除した実験室で行われる。一方、気象学や地震学のような研究は、異

² Hayden White, *Tropics of Discourse: Essays in Cultural Criticism* (Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1978).

³ *Tropics of Discourse*, pp. 82-5 を参照。

質なるものの集合体を研究するわけであるから、個々の要素の物理・化学的な研究に加えて、それぞれの要素が相互作用して生まれる集合体としての特性（パターン）を発見することが重要になる。たとえば、気象学においては、対象地域の気温、湿度、風力・風向、雲の種類等の分析とともに、それらの要素の組み合わせによって生じる降雨のような気象変化の可能性を示すパターンの特定が行われている。このように「科学（実証）」的方法論には大きく2面性があることがわかるであろう。

ところで、「科学（実証）」的方法論の2面性についての言及で一体何がしたいのかというと、Whiteのように歴史の主観的側面から文学との近似性にのみ注目するのではなく、歴史と文学と科学——特に、自然環境に関する科学——の3者間の近似性の可能性にも目を向けることもまた重要だということだ。歴史はそもそも人間の集合体の変容の記録であるのだから、単に点や線としての歴史資料の発掘だけではなく、自然環境に関する科学との近似性となるような社会全体のパターンの変化の観察も重要になってくるだろう。フランス革命におけるLouis XVIやMaximilien de Robespierreがどのように性格づけられるとか、様々な事件がどのように取捨選択されるとか、どのように描写されるとか、どのように配列されるかという問題に加えて、対象とする時代・地域全体にどのようなパターンが観察されるかがその「歴史」を捉える上で重要になってくるのである。そのような「歴史」制作に関わる全体像を、Whiteの「歴史」概念では十分に捕捉し得ていないと思われる。

それではどのようにすれば対象とする時代・地域の「歴史」制作の全体像を観察できるのであろうか。1つの仮説として、社会の様々な要素が複雑に絡み合って相互に作用することで全体をある一定方向に動かす——ある時代・地域にある特定のフェーズを与える——「力」が生み出されると想定する。ちょうど自然環境においてプレートに蓄積されたエネルギーが地殻変動（地震）をもたらし、大気に蓄積された熱エネルギーが様々な気象の変化（温暖化）をもたらすと考えられるように、人間の歴史においても、ある時代・地域の多くの人々を一定の方向に向けさせる「力」が働き、ある場合は革命を、別の場合には近代化をもたらすと想定する。そのような前提に立てば、歴史を研究するためにはある時代・地域のマジョリティを一定の方向に向けさせる「力」を特定する作業が重要になるだろう。

この「力」について、1つの例を挙げて考えてみよう。「インドの大反乱 (Indian Mutiny)」は大英帝国の歴史における大事件として歴史書だけではなく多くの文学作品でも描かれてきたが、その「インドの大反乱」が広大なインド亜大陸の各地に広まった背景として、イギリス支配への反乱を呼びかける符丁としての「チャパティ(chapati)」がインド中の村々に配られることによって事前に反乱への雰囲気醸成されていたという説がある。⁴確かに、

⁴ 英領インドに深く関与したイギリス人女性作家のFlora Annie Steelは、虚構を交えながら、日付から天候に至るまで綿密に資料を調べ上げ「大反乱」を再現することでインド人がどうしてあのような「残虐な行為」に至ったかを明らかにしようとした小説 *On the Face of the Waters* の中で、“chupatti [sic]”の拡散を次のように記している。外の世界とはまるで交流がないと思える村に一人の男がやってきて、村の見張り役に「貧富にかかわりなく日々のパンとなるパンケーキに似て丸く平たいケーキ」を差し出ししながら、次のように簡潔に言う、『(これを) 長老たち

反乱のきっかけとなった Meerut の一部隊のインド人傭兵の反乱が短時間で広大なインド亜大陸に広まったというのは不可思議である。支配者のイギリス人が近代的な通信手段をインドにもたらしたといっても、今日のようにインターネットによって世界中に瞬時に情報が行き渡るような状況ではなく、Meerut の一部隊でのインド人傭兵の反乱に他の地域のインド人を共時的に共感させるほどの情報が瞬時に伝わったとは考え難い。まして、19 世紀中頃のインドはナショナリズムが浸透するはるか以前の多言語/多文化の混成社会であり、Meerut のインド人傭兵の反乱が全くの突発的な出来事であるのなら、他の地域の部隊のインド人傭兵は依然としてイギリス人指揮官の命令に従順に従ったであろう。しかし実際にはムスリムやヒンドゥーを問わず多くのインド人傭兵が Meerut のインド人傭兵の反乱に呼応して反乱を起こしたのであるから、それ以前にインド人の多くをある方向に向けさせるような何らかの「力」が働いていたと考えるのは必ずしも不合理ではないだろう。それがもしチャパティを通してであるとするのなら、このチャパティは一種のメッセージだといえる。そして、このメッセージを解読できるコミュニティ、つまり土着宗教を媒介にするにせよ、伝統的な社会ネットワークといった想像の共同体意識を媒介にするにせよ、共通の言説の流通するコミュニティ/場が密かに作られていたことになる。このように考えた時、このコミュニティ/場の構築こそが歴史的变化を起こす重要な要因であり、「インドの大反乱」ではコミュニティ/場を共有する巨大な集団に「チャパティ」という記号が拡散されたことによってある種の雰囲気——必ずしもイギリス支配に対する具体的な反乱の戦術を意味しない——が醸成されたと想定されるのである。このことはまた、フランス革命や明治維新といった社会全体を変容させた歴史的大事件でも、ある大きな集団内に共通する言説が流通することによって社会的大変動を引き起こす土壌ができていたと考えられるのである。そのようなある時代・地域の多くの人々を一定の方向に向けさせる「力=言説」とそれによって人間集団に現れる新たなパターンを特定しどのように描き出すかが歴史研究において重要であり、また、社会事象を扱う文化研究においても重要であると考えられる。

3. White 的「歴史」分析の補完としての「知の考古学的」研究法

再度 White に言及すると、彼は A. J. P. Taylor の *The Course of German History: A Survey of the Development of Germany since 1815* (1945)からのワイマール共和国の14年の歴史を10行余りで簡潔に記述した「どちらかといえば悪気のない」文章を詳細に分析し、事実を客観的に述べたと定評のある文章において、歴史事象が描写される際に使用されるレトリックによ

に。南の地から北の地まで。東の地から西の地まで。』。このようにチャパティが届けられた村では、首長の妻が新たに2枚焼き、それらをその村の見張り役とその見習の男によって西と北の村に届けられることになる。(pp. 132-6) このようにこの小説では、獣脂の塗られた「菓莢」への言及はあるもののチャパティが意味する具体的なメッセージは特定されることはなく、ただ地平線のかなたから“the master”がやってくる時村共同体の境界を超えてチャパティが拡散されることにより形成されるインドの村々の土着的で秘教的なネットワークが暗示されている。Flora Annie Steel, *On the Face of the Waters* (New York: The Macmillan Company, 1897).

って歴史家の解釈がいかにかに読者に伝えられるかを例証している。Taylor の記述によると、ワイマール共和国は「理論上は(in theory)」14年ばかり続いたのだが、最初の4年は第1次世界大戦後の政治的・経済的混乱に飲み込まれた状態にあり、終わりの3年間は暫定的な独裁状態であり、中間の6年間だけが「表面上は(ostensibly)」民主的で、平和であり、その前後の時代の「異常さ」に比して「多くの外国人の観察者の目にはその中間の6年間は正常な状態であり、『本当の(“true”)]ドイツ」であるように見えたのであろうが、「より深く見通せたなら、その6年間にドイツ人の性格の美点以外の原因を発見しただろう」と記している。このTaylor の記述に対してWhite は、「理論上は」、「表面上は」、「『本当の』」などの修飾語句を抽出し、見かけ上は歴史事実の時系列の記述と客観的な分析であっても、使用されるレトリックにより歴史家のアイロニカルな解釈がコード化されており、その「潜在的意味(the latent meaning)」——それはおそらく、ワイマール共和制が長続きしなかったのはドイツ人の(美点以外の)性格から必然的であった、というようなことであろうが——を読者に解説させようとしているのだと説明する。そしてWhite は、Taylor のワイマール共和国の14年の歴史記述を「疑似悲劇(pseudotragedy)」と分類するのである。このように、たとえいかに平明な記述であり、事実だけを描くことを目的にしていると思われる文章であっても、言語自体の修辭的な使用によって「派生的な意味(secondary meaning)」が「『記述される(“described”)]現象の下/背後」に投射されているというのである。⁵さらに一見客観的記述をしているようでも、歴史家は詩人や小説家と「同じ比喩的戦略(the same tropological strategies)」、「同じモダリティ(the same modalities)」を利用して記述しているとWhite はいう。すなわち、小説家が自らの断片的な想像物を1つの作品にまとめ上げるように、本来は無秩序であり混沌とした世界を整然とした世界として見せるために、歴史家は歴史資料から抽出した「未加工(unprocessed)」の「時系列的に連関する断片の集積(a congeries of contiguously related fragments)」を一般的ではなくある特有なまとまりとして組み立てるのだという。⁶

つまり、この「歴史」に関する理論的考察においては、歴史家が過去の記録という素材を取捨選択し、修辭法を駆使しながらまとめ上げることによって自身の解釈を「『記述される』現象の下/背後」にコード化して歴史書を作成し、一方、同じコードを共有する読者はその解釈を知らず知らずに解読して受け入れるというメカニズムが提案されている。しかしながら、歴史家が歴史資料から「時系列的に連関する断片の集積」を抽出するその「記録」というのは、さながら河原に落ちている未加工の石ころのようなものではなく、無数の社会事象の中から当時の個人や集団によって選び取られコード化された、つまり人為的加工を施した上で残された歴史記録なのである。上記のTaylor の例でいえば、ワイマール共和制時代の「中間の6年間は正常な状態であり、『本当の』ドイツ」であると見た「多くの外国人の観察者」の記録をTaylor は「より深く見通せ」ない浅薄な観察として一蹴したが、それでもまぎれもない歴史資料の1つなのである。ひょっとするとその記録はワイマ

⁵ *Tropics of Discourse*, pp. 107-110 を参照。

⁶ *Tropics of Discourse*, pp. 125 を参照。

ール時代のドイツ人をナチズムへと駆り立てていった——もちろん Taylor 自身はその影響下にいなかった——当時の「力=言説」と同期された記録、同じコード体系=言説編成の下でなされた評価である可能性もある。もしそうであるのなら、Taylor はドイツ社会をナチズムに駆り立てた「力=言説」の痕跡を残す貴重な歴史資料の1つを見落としたことになる。

歴史資料としての「記録」自体にすでに何らかの加工が施されているという点についてさらにいえば、たとえばアメリカでの映画やテレビドラマを過去の歴史資料と考えるとき、1960年代の *Guess Who's Coming to Dinner* (『招かざる客』) や *Star Trek* (『スター・トレック』) 以前の映画やテレビドラマで主要で主体的な役に白人以外の俳優がキャスティングされている例はほとんど思い当たらないが、1970年以降、白人、黒人、ヒスパニック、そしてアジア系の俳優の比率を意識したキャスティングが行われるようになってきている。このキャスティングの変化が単純にアメリカの実際の人種比率の変化を反映したのではなく、アメリカ社会における人種観の変化からより大きな影響を受けていることは明らかであろう。このことはあらゆる歴史資料にも当てはまることであり、どのような社会事象が記録として残され、いかに言語化——映像化も含めて——されるかは、ランダムに記録されていくのではなく、当時の記録制作者を取り巻く言説やイデオロギーに関わってくるのである。つまり社会事象の記録制作自体もまた、社会構成員を一定の方向に向けさせ、当該の社会事象を起こさせたところの「力=言説」の存在と密接に関連しているのである。もっともその「力=言説」は、社会体制を変革・変容させるベクトルとして働くだけではなく、伝統・習慣を反復・維持させる反動として働く場合もあり、後者の歴史記録が既存組織や保守的情報媒体内において反復記録されるのに対して、前者の場合はある時点から拡散的に出現する記録として登場してくる。このような記録の様態を様々な歴史資料から拾い出し、それらから復元できる「一定の方向性」、つまり「力=言説」を明らかにする作業により歴史を動かす——もしくは、変化を阻止しようとする——原動力の実態が認識できるのである。そしてまさにこの「歴史」発掘の作業こそが、「知の考古学的」研究の目的である。⁷

上記の「知の考古学的」研究を文化記号論的に定義するのなら、現代のドミナントな文化コードによって歴史資料を分析・評価することにより「歴史」を再・現前化するのではなく、研究対象の時代に書かれた歴史資料からその時代・地域における文化コードを抽出し、当時の人々（の多く）が社会の様々な事象をどのように記録し、読み解いていたか——そして、彼らを突き動かした「力=言説」——を解析することでその時代の「知層構造」を再・現前化するとともに、その「知層」の根源にあった「価値の源泉」を突き止める作業である。もっともかつて社会に影響力を持った「力=言説」であっても現在においてその影響力をほとんど喪失している場合、研究対象とする時代の人々が思い描き記録する彼らにとっての「現在」——われわれにとっては「過去」——を現在の読者にいかに言語化し

⁷ 詳しくは、拙論『『近代化』の反復と多様性』の方法論について——「東と西」の知の考古学的解体に関する研究——、『月刊 考古学ジャーナル 7』(770巻、ニューサイエンス社、2022)を参照。

て伝えるかの問題が残る。まさにこの問題とはアポリアである。たとえば、第2次世界大戦当時に「天皇陛下万歳」を唱えて自爆した日本兵を突き動かした「力=言説」を今日の言葉で説明するとき、軍隊組織の中で強要されたに過ぎないとして否定、または隠蔽する誘惑を抑制しつつ、かつアナクロニズムの誹りを回避して説明することは至難の業であろう。

繰り返しになるが、「知の考古学的」研究が、ある時代・地域の多くの人々を一定の方向に向けさせた「力=言説」を抽出することを目的にすると、抽出された「力=言説」が今日でも機能している場合はともかく、すでに影響力を喪失している——もしくはマイノリティにのみ関わる——場合は、現代のマジョリティの読者に言語化して伝える作業が困難であるだけでなく、独占的に流通する歴史というのは勝者/強者の創作した物語であると先述したが、勝者の——そして強者集団の——歴史家は、勝者/強者側に都合のいい事実を取捨選択するだけではなく、敗者/弱者に関する事実を歪曲したり隠蔽して物語を作成するため、⁸残された歴史資料から「歴史」を再・現前化することが一層困難になる。

3節においては、社会事象の「記録」の中から歴史家——特に、勝者/強者側の歴史家——が選択/潤色して創作する「歴史(物語)」のメカニズムとその研究方法を理論的に考察してきたのであるが、その理論的考察の有効性の検証として、次節以降、日清戦争後に欧米圏に広まった「黄禍論」を背景に、1930年代の日本と中国の「満洲国」にまつわる「歴史」創作の熾烈な争いを経て、第2次世界大戦の連合国側の勝利によって、何が「歴史」とされ、何が「非歴史=虚偽」と判断され、そして何が隠蔽されたかを中心に論を進めていく。

4. 日本の「歴史正典」と「記述された」日本と黄色人種について

今日の日本の「歴史正典」は、1930年代初頭からの10数年間を除いて、常に日本人の権力者(勝者)によって日本語で作成されてきたのであった。もちろん『魏志倭人伝』をはじめ、日本の歴史を扱った外国人や日本のマイノリティによって作成された「歴史」は存在するが、重要なことはそれが「正典」として認められた歴史、すなわち「真実の歴史」として国家や国民が受け入れているかどうかということである。そもそもの日本の起源そのものが天皇の命の下で構想され『古事記』や『日本書紀』として言語化されたのであり、今日その内容の科学的信憑性には疑義があるとしても、天皇の権威や日本民族・文化の特異性を担保する意味で依然として「正典」として機能している。しかしながら、1930年代から1945年までの日本の歴史の正典はアメリカを中心とする連合国によって作成されたのであった。⁹もう少し正確にいうと、日本人によって書かれた1945年までの10数年間の日本語の歴史の正典が、連合国によって作成された「日本の歴史」に「正典」の座を奪われるとともに、そこに記載されていた内容の多くが「非歴史=虚偽」と判断されるか、隠蔽さ

⁸ そのような勝者/強者側の歪曲・隠蔽が、たとえば Edward E. Said が前景化した「オリエンタリズム(Orientalism)」の西洋と東洋の言説上の不均衡な権力構造のように、偏向した「歴史」言説を生み出すのである。Edward W. Said, *Orientalism* (New York: Vintage Books, 1979).

⁹ GHQによる日本の歴史の書き換えについては、拙編著『「近代化」の反復と多様性——「東と西」の知の考古学的解体』(溪水社、2021)の93頁から114頁に詳述している。

れてしまったのである。もちろん歴史の書き換えがあったということ、「正典」の差し替えが行われたということは、「非歴史=虚偽」が「歴史=真実」に置き換わった、もしくはその逆の「歴史=真実」から「非歴史=虚偽」への置き換えが行われたということを単純に意味するのではない。ここでいいたいのは、そのどちらかが「事実」としての歴史であり、他方が「虚構」としての歴史ということではなく、いずれの「歴史」も作成者の「解釈」や「イデオロギー」を反映した「物語」であるということである。すなわち、日本人の「解釈」や「イデオロギー」を内在する「歴史」が、アメリカを中心とした連合国の「解釈」や「イデオロギー」を内在する「歴史」に取って代わられたということである。

このように、「歴史正典」とは勝者/強者によって作成される。ただし、勝者/強者が常に単独で存在しているわけではなく、実際には同時に複数存在する、したがって複数の「歴史正典」が存在する場合が多いのである。同じ歴史事象であっても、A国で教えられている歴史（正典）とB国で教えられている歴史（正典）で異なる記述や解釈がなされることはよくある現象である。要は、その時空間の言説を支配している権力者が「歴史正典」を作成するのであって、それ以外の時空間では別の権力者の異なる「歴史正典」が流通する。そして一方の側の言説の影響力が非常に強くなる場合、たとえば19世紀から20世紀にかけて西欧帝国主義の支配が世界を覆った時代においては、西欧の似非生物学的な人種主義言説が西欧語を介して世界に流通し、白人種の進化論的優位が非白人にも受容させられていった。その意味において勝者/強者は言説形成における主体者=発信者であり、敗者/弱者は客体者=受容者なのである。植民地化されれば、先住民は単に土地や天然資源を奪われ労働力を搾取されるだけでなく、支配者によって都合よく代弁表象されてしまうのである。

次に、以上のような「歴史正典」とは別の「歴史」、あるいは、日本語以外の言語によって「記述された」日本、及び、黄色人種について概観してみよう。

日本の開国後、日本から提供された文献が西欧語に翻訳されるとともに、日本に長期滞在した Ernest Mason Satow のような外交官、Basil Hall Chamberlain や Lafcadio Hearn のようなお雇い外国人、Isabella Lucy Bird などの紀行文、そして西欧のジャーナリストによって「日本」が西欧で紹介されただけでなく、岡倉天心、新渡戸稲造などによって英語で伝えられた。そのような直接的・間接的に描かれた日本イメージに加え、断片的な情報を基に異国趣味、もしくは人種的偏見によって色付けされた「日本」イメージも生産され、世界中に流通されることになる。そのような日本語以外の言語を介して形成され流通された個々の「日本」イメージの中でも、本稿で注目したいのは「侵略者」としてのそれである。

西欧語による言説において、「怠惰」・「退行」・「強欲」・「肉欲」などのネガティブなイメージで非西欧人が表象されていたことは、オリエンタリズム批判の研究で明らかにされている。¹⁰しかしながら、ドイツ帝国の皇帝 Wilhelm II が広めた「黄禍(yellow peril)」のローガンにより、これまで「従順」・「不活発」・「消極的」と考えられてきた黄色人種に対し

¹⁰ たとえば、Patrick Brantlinger, *Rule of Darkness: British Literature and Imperialism, 1830-1914* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1988)を参照。

て、西欧諸国に対する潜在的「侵略者」としての新たな「黄色人種」イメージが19世紀末から20世紀初頭にかけてロシア帝国を含む西欧圏に広まったのであった。新興の軍事国家としての日本の台頭が、この「西欧への侵略者」イメージの拡散の主要な要因であったことは間違いないだろうが、この「黄禍」という造語が示すように、「黄禍論」の対象は日本という特定の国家ではなく「異教徒の黄色人種」に向けられたものであった。たとえばイギリス人作家 M. P. Shiel が1898年に出版した黄禍論小説 *The Yellow Danger* で描かれる東洋対西洋の世界戦争において、西欧を侵略しようとする首謀者が日本人と中国人の混血であるように、¹¹「西欧圏において「日本人」と「中国人」のイメージは差異よりも重なり合う部分が多かったといえる。つまり、日本人や中国人という「下位区分」はさほど重要ではなく、自分たちとは異なる宗教や文化を持つ「黄色人種」の無数の個が近代化し団結して誕生するかもしれない「総体」、そしてそのような潜在的な「総体」に対する恐怖こそが、「黄色人種」に「侵略者」イメージを付与し、「黄禍論」を生み出したといえるだろう。

しかしながら第2次世界大戦後の世界に流通する「歴史正典」においては、日本人と中国人の「下位区分」が非常に大きな意味を持つことになった。その「歴史正典」では、「黄禍論」が予言した西欧に襲いかかるイナゴの大群のような「黄色人種」の不気味なイメージではなく、「世界征服」を企む「日本」とその一番の犠牲者である「中国」という対照的なイメージが描かれている。もっとも、「非歴史=虚偽」とされた1930年代の日本の「歴史正典」においては、真逆ともいべきイメージ、対抗言説が充満していたのであるが。

次節においては、この巨大な塊としての「黄色人種」から「侵略者日本人」へのイメージ転換とその拡散を、1930年代後半に書かれたイギリス小説を使ってスケッチしてみよう。

5. 「侵略者日本人」イメージの拡散

イギリス人作家 Val Gielgud が1937年に出版した *Outrage in Manchukuo* では、40年前に書かれた M. P. Shiel の黄禍論小説とは違って悪巧みを企てるのはドイツ人と日本人である。¹² ドイツ人 Rudiger von Maltzan 大尉と日本人 Okuma 大佐らは、ハリウッド女優 Scarlet Royal を唆して中国に来させ、満州に向かう列車移動中にロシア人に拉致凌辱されたことにして、そのショッキングなニュースをアメリカのメディアで大々的に取り上げさせることで、アメリカ人の対ソ連感情を悪化させようとするが、新婚旅行の裏で諜報活動を行うイギリス人の主人公らによって Maltzan 大尉の手から Royal は無事救い出され、彼らの企みは打ち砕かれる。その際 Maltzan 大尉は殺され、一方 Okuma 大佐の方は忠君の務めを果たすことができなかつたことを詫びるため、「陸軍省」の建物の階段で「ハラキリ」により自害する。

大衆小説は、文学史でキャノンと位置付けられる文学作品とは違い、一般に流布しているステレオタイプのイメージを活用して小説世界を構築しようとする。それゆえ、出版当時は一般読者に受け入れられやすいのであるが、時間とともに消え行く運命にある。その

¹¹ Matthew P. Shiel, *The Yellow Danger* (Routledge/Thoemmes Press, 1998).

¹² Val Gielgud, *Outrage in Manchukuo* (London, Toronto, Melbourne and Sydney: Cassell & Company, Limited, 1937).

意味で文学作品としての価値は低いといえるのであるが、他方、移ろいゆく表層文化を知る上でいわば地層に埋まった化石のような役割をしてくれる。上記の *The Yellow Danger* では、白人に対して劣等感を持つ一方あるイギリス人女性に対して強い恋情を抱く貧相で狡猾な日本人と中国人の混血の男が、その女性に素っ気なく拒絶された腹いせにイナゴの大群のようなアジア人を率いてヨーロッパに襲いかかる小説世界を作り上げているのに対して、*Outrage in Manchukuo* の場合は、狡猾なナチス・ドイツの将校とサムライ日本の将校が侵略者のイメージを付与され、一方ロシア人は友好的に、そして中国人は従属民のイメージで描かれている。ここで注目すべきことは、1941年12月の日本軍による真珠湾攻撃やマレー半島への侵攻後に日本のイメージが悪化したのは当然であるが、依然として欧米人の間で黄色人種に対する差別意識が厳然と存在している一方で、¹³容姿も、言語も、文化も区別のつかない「黄色人種」という巨大な塊の中から、1937年の時点ですでに「日本・日本人」が「侵略者」として特化されてイメージ化されていることである。もちろん日本の中国大陆における軍事侵攻がその主たる原因であることは間違いないであろうが、「黄禍論」時代のように軍国主義国家日本が他の黄色人種を引き連れて西欧諸国を脅かすというシナリオが前景化することはなかったと思われる。あくまでも日本という特定の国家による侵略というシナリオである。では、なぜこの巨大な塊としての「黄色人種」から「侵略者日本人」というシナリオに改訂されたのか。本論では、この「改訂」に中国が欧米に向けて発信した英語によるプロパガンダが少なからず影響を与えたとみる。もっとも、日本も反中国のキャンペーンを行っていたのであるが、結果的には、日本国内はともかくとして世界でのそのプロパガンダの効力は全くなかったといえる。したがって、日中十五年戦争の実戦での攻防の情勢に反して、日本と中国の情報戦は中国側に分があったといえるだろう。

6. おわりに

本稿において、「歴史」創作とその「正典化」のメカニズムを中心に理論的に考察したのであるが、その考察の有効性の検証として、次回の「1930年代の日・中の『歴史』創作について(2)」においては、1920年代末から1945年までにプロパガンダのために作成された中国側の英語による印刷物と日本側の英語（及び日本語）による印刷物の幾つかを比較分析することで、中国人による「満洲国の歴史」創作と、日本人による「満洲国の歴史」創作を通して戦われた日・中の情報戦（言説レベルの覇権争い）の様態を詳らかにする。

※本稿は、2020-2023年度日本学術振興会科学研究費助成事業による基盤研究(C)「近代」の反復と多様性——「東と西」の知の考古学的解体に関する研究（研究課題：20K00388）の研究成果の1つである。

¹³ たとえば、BBCのテレビドラマを下敷きにした小説 *Tenko* (『点呼』) において、英領シンガポールにおける中華系シンガポール人への人種差別が描かれている。Anthony Masters, *Tenko* (London: British Broadcasting Corporation, 1981).